平成１６年度

調査研究事業報告書

全国知的障害養護学校ＰＴＡ連合会

地域のボランティア育成と
高等部生徒の外出支援プログラム

東京都立矢口養護学校

全知Ｐ連調査研究事業報告

研究主題

地域のボランティア育成と高等部生徒の外出支援プログラム

東京都立矢口養護学校ＰＴＡ

＜はじめに＞

本校は、東京の城南地区、多摩川の近くに位置し、西は田園調布の住宅街、東は高度経済成長を支えた中小工場地帯を学区域とする学校です。

小学部・中学部・高等部併せて２３８名の児童・生徒が在籍する都内では３番目のマンモス校です。

本校ＰＴＡは平成４年９月の週５日制の導入と同時に当時のＰＴＡが中心となり、土曜活動を盛んに行なってまいりました。

そのような環境の中、今年度は安全かつ活動しやすい校内ではなく、学校の外に出て、活動するプログラムを高等部生徒を対象に取り組んでみることにいたしました。

＜目的＞

高等部卒業後の社会生活を充実するためには、仕事と余暇のバランスをとって生活していくことが大切です。しかし、卒業生の生活をみると、休日には外出したくても家で過ごしている人が多くいます。その原因の中には、地域活動の経験が少なく地域の施設等の活用方法を知らないことや一緒に出かける仲間や支援者がいないことがあります。

そこで、地域のボランティアを育成して支援者を増やしていくことを一つの目的としました。支援者を育成することで、生徒たちは在学中から友達や支援者と地域での余暇活動の経験を積み重ねることできます。それによって自分にあった楽しみを見つけ、地域の施設や交通機関の活用方法を知ることで、主体的に余暇活動ができるようにしていきたいと考えました。

（１）　地域のボランティアの育成…単発的なボランティアではなく、自分で考えて、支援できるようになる。

（２）　高等部の生徒の自立・社会参加。ボランティアの援助を受けながら、最終的には友達同士で外出できるようになり、余暇活動の広がりが持てるようになる。

＜活動の概要＞

ＰＴＡ活動の高等部生徒の休日における外出活動「お出かけプログラム」と都立学校公開講座の「ボランティア養成講座」の実習を融合して行ないました。

（１）都立学校公開講座（ボランティア養成講座）の活動
年間 15 時間、ボランティア養成講座を開催しました。内容は、講義と『高等部おでかけプログラム』での外出支援の実習です。ボランティア養成講座を 4 年間実施して、年間 10~15 名の受講者を育成しました。
（基本的にはボランティア養成講座受講者を中心に地域の皆さんに声をかけました。）

（２）矢口養護「おでかけプログラム」の活動
参加希望生徒 32 名（登録制）を２つのグループ（Ａ，Ｂ）に分け、月 1 回１グループ１６名で実施しました。生徒は隔月の参加になりました。
内容は交通機関、施設、レストラン等の活用です。目的地は、ボウリング場や科学館等で２．３回同じ場所へ行くことで、生徒もボランティアも場所に慣れ、自発的な活動を引き出せるようにしました。

① ボランティアカードの作成と活用
保護者が具体的な支援内容・方法を記したボランティアカードを作成して、活動前に講師（教員）または保護者からボランティアに支援方法を説明しました。

② 活動計画の説明
講師（教員）の方で参加する生徒が一日の流れがわかるように日程表を作成しました。

＜活動＞

プログラムＡ　ボウリングとマクドナルドで昼食

（実施日）　Ａグループ　５月１５日　７月１０日　９月４日
　　Ｂグループ　６月１９日　８月２８日　１２月４日

（実施場所）　蒲田井門ボウル・蒲田マクドナルド

（行程）

９：３０　学校出発→徒歩→武蔵新田駅→多摩川線→蒲田駅→徒歩→
１０：００　井門ボウル
１１：４０　マクドナルド
１２：３０　徒歩→蒲田駅→多摩川線→武蔵新田駅→徒歩→学校
１３：００　解散

（留意点）

1　車に気をつけて、団体行動する。
2　電車の切符を自分で買う練習をする。
3　電車の中でのマナーを考えて行動する。
4　ボウリングの靴を自分で借りる練習をする。（機会）
5　ルールやマナーを守り、ボウリングを楽しむ。
6　ボウリング終了後は、手洗いし、友達が終わるのを待つ。
7　マクドナルドでは、自分の食べたいものを自分で買う練習する。
8　マナーを守って、食べる。
9　食べたものを自分で片付ける。

（検討点）

1　自動販売機での切符の買い方に練習が必要である。
2　靴を借りるとき、サイズがわからないので、自分のサイズを予め、確認させることが必要である。
3　マクドナルドで注文するとき、セットがあるので、本当に食べたいものを注文できないことが多くあり、次回から、申し込みの時点で、保護者に記入してもらうようにした。

プログラムＢ　東芝科学館とサイゼリアで昼食

（実施日）１０月１６日（Ａグループ）
　　１１月１３日（Ｂグループ）

（実施場所）川崎東芝科学館・サイゼリア

（行程）

９：３０	学校出発→徒歩→バス停（矢口小前）→バス（幸公園前）→徒歩→東芝科学館
１０：１０	東芝科学館見学
１１：３０	サイゼリアにて昼食
１２：３０	サイゼリア出発→徒歩→バス停（幸公園前）→バス→バス停（矢口小前）→徒歩→学校
１３：００	学校解散

（留意点）

1　車に気をつけて、団体行動する。
2　バス料金を自分で支払う練習をする。
3　降りるバス停を確認し、ボタンを押して、降りるよう練習する。
4　東芝科学館では、コンパニオンの説明を静かにきく。
　色々なアトラクションを経験する。
5　サイゼリアでは、メニューから自分の食べたいものを注文する練習する。
6　マナーを守って、食べる。
7　支払いを自分でする練習をする。

（検討点）

1　バスの支払いは小銭がないと難しい。
2　サイゼリアの支払いに時間がかかる。

プログラムＣ　水の科学館とサイゼリアで昼食

（実施日）１月２２日（Ａグループ）
　　２月１２日（Ｂグループ）

（実施場所）お台場　水の科学館・サイゼリア

（行程）

９：３０	学校出発→徒歩→武蔵新田→多摩川線→蒲田→ＪＲ→大井町→臨海線→東京テレポート
１１：００	サイゼリアにて昼食
１２：００	水の博物館見学・体験
１４：１０	水の博物館出発→徒歩→東京テレポート→臨海線→大井町→ＪＲ→蒲田→多摩川線→武蔵新田→徒歩→学校
１５：３０	学校解散

（留意点）

1　車に気をつけて、団体行動する。
2　電車の切符を自分で買う練習をする。
3　電車の中でのマナーを考えて行動する。
4　水の科学館では、静かに、コンパニオンの話しを聞いて見学する。
　　様々なアトラクションを経験する。
5　サイゼリアでは、自分でメニューから食べたいものを選び注文する。
6　マナーを守って、食べる。
7　支払いを自分でできるよう、練習する。

（検討点）

1　時間が長かったので、疲れた。
2　グループごとに支払いをしたので、支払い時間は短縮できた。
3　乗り換えが、多かったので、時間がかかる。
4　上級ボランティアが担当となり、企画・運営をした。

ボウリング場

キップを買う

東芝科学館にて

レストランにて

＜参加生徒感想文＞

「『お出かけプログラム』に参加して」

高３　　女子

いちばん楽しかったのは、みんなで行った東京都水の科学館です。はじめてりんかい線に乗ったのでよかったです。その日のお昼はサイゼリアで「半熟卵のミラノ風ドリア」を食べました。すごく美味しかったです。あと、はじめておだいばに行けた事がすごくうれしかったです。つぎに楽しかった事は、５月１５日土曜日の日に行った第一回蒲田井門ボウルでのボウリング大会です。その日、私は、ストライクを３回もできたのですごくうれしかったです。

その日のお昼はマクドナルドで、チキンマックバーガーセットをたのんで食べました。すごく美味しかったです。さいごにほんとうにおでかけプログラムに参加してすごく楽しい思い出になりました。

「ボウリング」

高３　　男子

僕は蒲田駅のボウリングで２～３ストライクをとってがんばりました。マクドナルドで生徒とボランティアで昼ごはんを食べました。お出かけプログラムもいっしょに行ってくれました。本当にありがとうございました。楽しかったです。学校から電車に乗って家に帰りました。

「『おでかけプログラム』に参加して」

高３　　男子

おでかけプログラムにいきました。ボウリングとおだいばととうしばかがくかんにいきました。ぼくはボウリングが一ばんたのしかった。はじめてストライクをだしてうれしかった。マクドナルドでひるごはんをたべました。ハンバーガーを２つもたべました。ともだちとたべておいしかった。ほんとうにたのしかった。

＜ボランティア感想文＞

高等部お出かけプログラム

女性

「無事に終わって、良かったー！」というのが、今の正直な気持ちである。

矢口養護学校でボランティアとして、お子様方にかかわらせていただいて三年になる。小学部、中学部のお子様方とのかかわりを経て、今年度は高等部生のお出かけプログラムに参加させていただいた。

年度初めに全１０回の年間予定をいただいたので、我が家のカレンダーに書き込み、他の予定を組む時にボランティアの日は避けるようにすることができた。

９月から、１２月はボランティア養成講座とのタイアップだったので、新しい行き先の開拓をさせていただいた。お台場は人が多くて、集団で行動するのは難しいかもしれないと思っていたが、実地踏査をしてみると、水の科学館の辺りは人が少なく、広々としていて十分みんなで来られると思った。実地踏査の報告書を書く作業は楽しかった。

幸い１月も２月も天気に恵まれ、事故もなく終わり、ホッとしたが、実行して初めてわかる現実もあった。お出かけ時間が長くなれば、ご家庭の方にはそれだけ楽していただけると単純に考えて、良いこととしか見えていなかったが、参加したお子様の中にはすっかり疲れ切り、帰りは機嫌が悪くなったり、途中の駅から家に帰ろうとしたりする子がいた。みんな元気で学校まで帰るにはやはり午後２時頃までに帰れる範囲内で行き先探しをした方が良いのではないかと思った。一人一人の切符購入に時間がかかるので、乗り換えは１回までが良いし、天気に恵まれるとも限らないので，駅やバス停から近く、雨でも楽しめる施設が良いなど、行き先探しは難しく、これからも心かげていきたい。

また、月によってはボランティアの人数にかなり、差があったことが少々残念だった。年間を通してコンスタントに人が集められると良いと思う。

ただし、いくら人が集まっても、ボランティアにできることには限界があり、このプログラムの実行は先生方のお力なしには成立し得ない。代休もなしに、お休みの日に来られる先生方には本当に頭が下がる。

そんな先生方や企画運営してくださるＰＴＡの皆さん、そして我々ボランティアの力によって、高等部のお子様方に少しでも喜んでいただけたら嬉しい。ボランティアというのは「してあげる」ものではなく、「させていただく」ものだとつくづく思う。楽しい時間を過ごさせていただいて、ありがとうございました。

ボランティア養成講座・おでかけプログラムに参加して

高校３年生　男子

僕には自閉症の弟がいます。その弟がこの春、矢口養護学校高等部に入学しました。その頃に、学校でボランティア養成講座があるというお話を伺い、参加を決めました。

それまでに学校の土曜活動に参加したり、近所の福祉園のお手伝いをしたこともありました。また、普段から弟と二人で外出することもあるのですが、その時とは違い、ほとんど初対面の人と外出するということで、不安もありました。

ですが、学校での事前講座で、コミュニケーションのとり方や道を歩く時、交通機関の利用の際に気をつけること等、１対１の場面だけでなく集団での活動をスムーズに行うためにも重要な色々な事を教えてもらい、受講前とは違う少し余裕のある気持ちで、おでかけプログラムに向かうことができました。

おでかけプログラムでは，蒲田のＩＭＯＮボウルでボウリングをしたり、川崎の東芝科学館、お台場の水の科学館を見学。マクドナルドやサイゼリアで一緒に食事をしたりと、僕自身も楽しめる盛りだくさんの内容でした。参加した生徒さんもみんな楽しそうに過ごしていました。

ボウリングの時はシューズやボールのサイズを選ぶのに少し手助けして、見学では展示物の説明を僕なりにしたりはしましたが、その他にはみんな大きな手助けは必要とせずに楽しんでいた印象があります。食事の時にもそれは同じで、一緒にとても楽しく食事ができたと思っています。

その反面、僕自身が不慣れで手際の悪かったという事も大きな原因なのですが、電車の乗り降りが難しかったという事が印象に残りました。一度、改札を出るときに、その時に僕といっしょだった生徒さんの切符が見当たらなくなってしまうという事があり、少し探した後に見つかったのですが、グループでの動きを遅らせてしまいました。

この事で、急いでいるときでも切符をどこにしまったかなど、持ち物の確認は大切だと感じました。「確認する」ということは持ち物以外の他の場面でも、一緒に行動する人と、またグループ内でしっかりとしなければならない大切なことです。今回のおでかけプログラムでは先生方に多くをお任せしてしまっていた人数の確認なども、次回からは積極的にしていかなければならないと強く思いました。

今回参加させていただき経験できた様々なことで、普段弟とすごしている時には気付かないような、きめ細かい配慮について再確認できました。

一年間、大変お世話になりました。ありがとうございました。

＜成果＞

ボランティア養成講座は、４年間で初級「初めての支援」中級「外出の支援」上級「外出の企画立案・実施」のボランティアを養成しました。１６年度は、３名の上級者を育成できました。受講生は次年度の「お出かけプログラム」等でボランティアとして活躍していただきます。

生徒の何人かは、休日に友達同士で、「お出かけプログラム」で行ったボウリング場へ出かけられるようになりました。

＜今後の課題＞

（１）「お出かけプログラム」の活動内容の充実

生徒が興味・関心を基に活動を主体的に計画し、実施する内容にしていきたいと考えています。

（２）ボランティアの育成から指導者養成へ

ボランティア養成をすすめるとともに、「お出かけプログラム」の企画・運営ができる指導者養成を区（地元:大田区）と連携して行っていきたいと考えています。

（３）重度の生徒の余暇活動

ボランティアの方が充足してきたら、重度の障害のある生徒の余暇活動につついても検討していきたいと思います。

平成１７年1月２９日

各位

都立矢口養護学校ＰＴＡ
会　　長　佐々木　桃子

高等部生おでかけプログラム　ボランティアのお願い

新春とはいえ、厳しい寒さの続く毎日ですが、お変わりありませんか。
日頃、子どもたちの活動にご協力いただきありがとうございます。
すでに、今年度「高等部お出かけプログラム」についてはお知らせしておりますが、第１０回を２月１２日（土）に行ないます。ご都合がよろしければご協力いただきますようお願いいたします。

日　程	プ　ロ　グ　ラ　ム
５／１５	蒲田ボウリング・昼食　　終了
６／１９	蒲田ボウリング・昼食　　終了
７／１０	蒲田ボウリング・昼食　　終了
８／２８	蒲田ボウリング・昼食　　終了
９／４	蒲田ボウリング・昼食　　終了
１０／１６	東芝科学館・昼食　　終了
１１／１３	東芝科学館・昼食　　終了
１２／４	蒲田ボウリング・昼食　　終了
１／２２	お台場　水の博物館・サイゼリアで昼食　終了
２／１２	お台場　水の博物館・サイゼリアで昼食

❤内容　　外出活動の支援　　（交通費１０００円と活動中の交通費は支給させていただきます。）
❤時間　　９：１０～３：１５　★いつもより長いです。
❤場所　　矢口養護学校本校舎玄関前　集合・解散
❤服装　　活動しやすいもの
❤持ち物　　特になし
❤担当　　早川先生・ＰＴＡ佐々木

第１０回お出かけプログラムボランティア申込書

お名前

電話番号
ＦＡＸ番号

締め切り２月４日（金）までにＦＡＸにてお申込ください。
ＦＡＸ番号　０３－３７５９－２７６３　（このまま切り取らないでＦＡＸして下さい。）

平成１６年４月２７日

高等部保護者各位

都立矢口養護学校ＰＴＡ
会　　長　佐々木　桃子

高等部生徒お出かけプログラムのお知らせ

美しい若葉が目にしみる季節の到来です。

矢口養護学校では、学校開放事業の一環として委嘱された先生方が「ボランティア養成講座」を行なっています。その受講生や地域のボランティアを育成することと高等部生徒の豊かな余暇活動の充実を図るため（友達同士でお出かけする等）、年 10 回のお出かけプログラムを下記の要領で行ないます。

このプログラムに参加を希望する方は、まず、登録して下さい。登録は、定員に空きがある限り随時受付ますが、なるべく年度当初にお願いいたします。

登録された方には、毎回プログラムの二週間前に詳細をお知らせいたします。（第一回は登録後に保護カードとともに配布いたします。）やむを得ず欠席する場合はご連絡ください。基本的には通年の活動となります。

5/15	土	蒲田ボウリング・昼食	10/16	土	未定・昼食
6/19	土	蒲田ボウリング･昼食	11/13	土	未定・昼食
7/10	土	蒲田ボウリング・昼食	12/4	土	未定・昼食
8/28	土	東芝科学館パソコン・昼食	1/22	土	未定・昼食
9/4	土	東芝科学館パソコン・昼食	2/12	土	未定・昼食

★担当教員　　早川先生　西岡先生　鷲尾先生　他
★時間　　９：２０～１：００
★集合・解散場所　　学校本校舎前
★持ち物　　お小遣い約 2000 円～2500 円くらい（交通費・昼食代・施設使用料）
　　愛の手帳・活動しやすい服装
★定員　　10 名～15 名

お出かけプログラム登録申込書

高等部　　年　　組

氏名

締め切り５月６日　　担任→ＰＴＡ本部メールＢＯＸ

ボランティアカード

支援者名（　　）

生徒氏名（　　）　年齢（　　才）

緊急連絡先（　　）

薬　　（有り・なし）支援方法（　　）

●活動内容に合わせて必要な項目を聞き取りましょう。

トイレ	要求（自分　、サイン、定時間隔　　分） 支援方法
食事	支援内容 支援方法
移動	場面（歩行、バス、電車等） 支援内容（目的の理解、信号、飛び出し、お金、切符）
好きな事	会話のきっかけ
注意事項	支援場面、内容、方法 ・ ・ ・
健康管理（発作、アレルギー、車酔い等の配慮）	
当日の様子 体調（　　）情緒（　　）生理（　　）排便（　　） 体温（　　C）朝食（　　）	
家庭から	
くつサイズ cm	マクドナルドまたはサイゼリアで食べたいもの

＊個人情報なので管理にご注意ください。使用後は責任もって返却してください。

発達障害に対する教育支援と
教育支援ネットワークのあり方

熊本県立大津養護学校

調査研究事業報告書

発達障害に対する教育支援と
教育支援ネットワークのあり方

目　　次

1　はじめに

2　専門性の向上

3　自閉症教育に関するアンケート調査

4　「研究部情報」

5　関係図書の充実

6　教材教具の充実

熊本県立大津養護学校

1　はじめに

学校の概要

本校は、熊本県の北東部、熊本県菊池郡大津町に所在する知的障害養護学校である。熊本市と阿蘇山のほぼ中間点に位置し、町の中央部を熊本と大分を結ぶ国道５７号線やＪＲ豊肥線が東西に走っている。

学校創立は昭和５６年で、県内の養護学校としては２番目に歴史の浅い学校である。平成５年に高等部が設置され、３学部体制となった。

恵まれた教育環境の中で、小学部２４名、中学部３３名、高等部５２名、計１０９名の児童生徒が在籍している（平成１６年度）。

熊本市出身者が約３分の１（４０名）を占め、次いで菊池郡市３１名、鹿本郡市・阿蘇郡が各１０名前後、その他、県下各地から在籍している。

数年前までは、児童福祉施設に入所している児童生徒が８割近くを占めていたが、自宅通学生が年々増加し、平成１６年度では凡そ半々となっている。

また、近年の傾向として、自閉症の児童生徒が増加しており、平成１６年度、高等部では約２５％、中学部では約３０％、小学部では約５５％を占めている。
医師の診断を受けていないが、その傾向が強い児童生徒を含めると、約６０％に達する。

学校の課題

平成１５年３月、「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」が出され、特殊教育から特別支援教育への移行が提言された。この報告では、一人一人の教育的ニーズに応じた教育的支援の充実と、盲聾養護学校が地域でのセンター的な役割を果たすことなどが盛り込まれている。

私は、これとほぼ時期を同じにして、平成１５年４月に大津養護学校に赴任した。１学期、２学期と時が経つうちに、気がかりなことがあった。

それは、児童生徒がパニック状態となり、あるいは咄嗟の出来事として器物を損壊したり、自傷・他傷などを引き起こすことであった。そして、そのほとんどが自閉症の子どもたちであった。主なものは、眼鏡の破損、自動車への損害、頭突・噛みつき・ひっかき等である。結果的に、被害額が大きく、ＡＩＵ保険を適用（未加入の場合は、保護者の負担）した事例が平成１５年度１年間で１１件に達した。保健室で手当を受けて済んだ程度のものまで含めると、かなりの件数を数えた。

障害特性によるもの、と言えばそれまでであるが、私たち職員の理解不足による支援のあり方にも課題があるのではないか、と考えた。本校にも、自閉症に詳しく、指導力に長けた職員もいたが、全員が一定以上の知識や指導力がないと、対応に一貫性がなく、かえって混乱を招くことにもなりかねない。全職員のレベルアップの必要性を痛感していた。

自閉症への取組

そのような時、学校と同じ大津町に所在する熊本県自閉症・発達障害支援センターを他の用件で訪問した折、熊本県・熊本日々新聞社主催の「自閉症フォーラム２００３」のポスターが目についた。

早速、職員朝会でそのことを紹介し、全職員に対して参加を要請した。出張扱いにすれば、一つの研修にせいぜい２人程度しか派遣できないため、自己研修による参加を要請した。

フォーラム当日は、休日であったにもかかわらず、全職員の半数を超える３５名が参加した。このことが、本校が学校全体として自閉症教育に取り組む出発点となった。

平成１６年１～３月、各地で開催される研究会・研修会への参加も、できるだけ自閉症に関するものを優先した。

平成１６年度の取組

平成１６年度を迎え、本校の研究テーマの一つとして「障害特性に応じた教育支援の充実」を加え、関係分掌部が連携し、取組みを進めるようにした。

校内で行う職員研修、外部の研究会・研修会への参加も昨年度に引き続き発達障害（自閉症、ＬＤ、ＡＤＨＤ、高機能自閉症等）関係を中心とした。主に休日に実施され、より多くの参加を期待するものについては、自己研修による参加の形をとった。平成１６年度の研修等の一覧は、本文に示しているとおりである。

外部の研修会では、保護者と共に学ぶ機会もあり、共通理解と信頼関係を深めるという、副次的な効果もあったと思われる。また、平成１６年９月の研修会は、「思春期の問題行動と対処法」というテーマで、ＰＴＡ（親の会）の主催で開かれ、それに関係職員が参加した。

また、研究部内に「障害特性に応じた教育支援研究プロジェクト班」を設け、『研究部情報』を発行し、情報提供と共通理解を図るようにした。『研究部情報』は、担当者の奮闘により、１６年度１年間で４３号まで発行できた。内容・項目等については、本文を参照されたい。

外部の専門家との連携という点では、学校評議員制度を活用した。本県の県立学校においては、平成１４年度から試行が行われ、本校は平成１５年度から学校評議員制度を導入した。平成１５年度は、地域との関係づくりを重視した人選が行われていたが、平成１６年度は、職員の専門性の向上と障害特性に応じた教育支援の充実を主眼におき、次の方々に学校評議員を委嘱した

岡田　稔久	小児科医、くまもと発育クリニック院長、（社）日本自閉症協会熊本県支部長
肥後　祥治	熊本大学教育学部助教授、障害児教育担当
尾道　幸子	社会福祉法人・江津湖療育園部長（療育支援）
松村　忠彦	ＮＰＯ法人理事長、社会福祉法人・チャレンジめいとくの里施設長、元熊本大学附属養護学校教諭
田邊　剛政	熊本県自閉症・発達障害支援センター指導員

学校評議員会は、原則年３回の開催であるが、評議員の方には様々な機会を通じて、本校の課題解決、個別の教育支援計画・個別の移行支援計画の策定、学校評価、本校の進むべき道等、大きな示唆を与えて頂いた。一養護学校の評議員としてはきわめて豪華なメンバーで、それぞれ御多忙な先生方であるが、快く就任して頂き、感謝に堪えない。

自閉症児の増加は、本校だけの課題ではなく、全国的な課題でもある。国立特殊教育総合研究所でも全国の実態調査が行われているが、結果が公表されていないので、とりあえず県内の特殊教育諸学校（盲学校１校・聾学校１校・養護学校１５校）について実態調査を行い、現状と課題を探った。

その他、関係図書を購入し、図書室に備え、職員・保護者の利用に備えている。教材教具の開発・充実、構造化などの取組を行った。

このような活動を通じて、職員の意識は確実に高まり、研修等を通じて全職員のレベルアップが図られたと確信している。この効果は、今しばらく推移をみる必要はあるが、ＡＩＵ保険適用事例が、平成１５年度の１１件から、平成１６年度は２件にまで激減したことに示されていると言えよう。

この調査研究は、これで完結するのではなく、むしろやっと緒についたと考えている。障害特性の理解と教育支援のさらなる充実、教育課程や職業教育の在り方、専門機関との連携、地域支援のネットワーク等、当初意図していたことで、課題として残された問題も多々ある。平成１７年度以降も、さらに工夫、改善を加え、知的障害との違いを考慮しつつ、発達障害の障害特性の理解、教育計画の工夫に取り組みたいと思う。そして、そのことは、ダウン症や知的障害等、他の障害の教育支援にも通じるものであるという方向性のもとに、障害のある児童生徒の能力や可能性を最大限伸ばし、社会参加と自立の基盤となるような教育活動を展開したいと考えている。

最後に、本調査研究に研究助成金を交付された全国知的障害養護学校ＰＴＡ連合会をはじめ、関係各位の御支援にお礼を申し上げると共に、さらなる御支援をお願い申し上げます。　（校長　松本健郎）

２　専門性の向上

自閉症児への教育支援の充実を図るためには、自閉症の障害特性を理解し、それに適した教育支援のあり方を探るのが先決と考え、平成１６年度の職員研修は、自閉症を中心とした発達障害関係に重点を置いた。

校内研修は、同じ大津町に所在する熊本県自閉症・発達障害支援センターの協力により、障害特性の理解から始めた。最初は、初歩的なことも取扱い、ある程度の知識等がある者にとっては少々物足りないこともあったかもしれないが、徐々に詳細に及ぶようにし、教育的支援のあり方へと進めるようにした。

校内研修一覧

	研修内容	期日	講師等
1	自閉症について	16.7.23	自閉症・発達障害支援センター・田邊剛政氏
2	自閉症の特性と支援の方法	16.8.27	同　上
3	新しい障害者観とカナダの障害者教育	16.9.1	熊本大学・肥後祥治助教授
4	思春期の問題行動と対処法	16.9.21	自閉症・発達障害支援センター・浦田裕之氏
5	自閉症の理解とその支援 ～自立と社会参加の実現～	16.10.13	愛媛大学・上岡一世教授
6	行動上の問題への応用行動分析による支援	17.3.2	熊本大学・肥後祥治助教授

研修４は、ＰＴＡ（親の会）の主催で行われ、保護者を中心として、職員も一部参加した。質疑のなかでは、保護者から家庭生活での悩み等が出され、学校の職員にとって、家庭での課題等を掴む機会ともなった。

研修５は、公開講演会とし、保護者や県内の特殊教育書学校、本校の通学区域（熊本市・菊池郡市・鹿本郡市・阿蘇郡）の小中学校にも参加を呼びかけた。外部からも多くの参加者が例年になく多く、約４０名の参加があった。

校外で行われる各種の研究会・研修会についても、発達障害関係を優先的に選び、計画的に参加するようにした。参加形態は、出張、自己研修である。自己研修においては、２０名以上の参加があった研修会もあり、職員の意識の高まりを感じた。研修会によっては、参加費（資料代）の必要な研修会も多く、参加を促進する上からも、参加費を補助することとした。

校外での研修については、主要なものについては簡単なレポートをもとに、職員朝会等で全職員に周知するように努めた。

校外研修一覧

番号	会議等名称	主催者	期　日	開催地
1	交流研・自立活動部会 「自閉症の特性と支援の工夫について」	知的障害養護学校交流研究会	16.6.17	本校
2	実践セミナー ＡＤ／ＨＤ児への理解と指導	発達協会	16.7.22~23	東京
3	実践セミナー 「行動の問題」への対応	同	16.7.31~8.1	同
4	実践セミナー 自閉症へのコミュニケーション指　導	同	16.7.24~25	同
5	発達障害教育セミナー	全日本特別支援教育支援連盟	16.7.26~28	札幌市
6	自閉症の特徴とその支援のあり方	県自閉症・発達障害支援センター	16.8.10	熊本市
7	ＬＤ・ＡＤＨＤ・高機能自閉症への教育支援体制の構築	言語・聴能教育実践科学会	16.8.16~17	東京都
8	九州ディスアビリティ・スタディ国際セミナー	熊本大学	16.8.18~19	熊本市
9	自閉症を正しく理解すること	日本自閉症協会・朝日新聞厚生文化事業団	16.8.31	益城町
１０	実践講座 TEACCHプログラム編	県自閉症・発達障害支援センター	16.9.16 16.11.11	熊本市
１１	実践講座感覚統合編	同	16.9.22 16.11.18	同
１２	学校心理士熊本県支部研修会	学校心理士熊本県支部	16.11.27	同
１３	自閉症協会熊本県支部公開講演会	自閉症協会熊本県支部	16.12.5	同
１４	自閉症フォーラム２００４	県自閉症・発達障害支援センター	16.12.18	同
１５	地域支援事業推進モデル事業全国発表会	東京都立中野養護学校	17.1.27~28	東京
１６	鳴門教育大学附属養護学校研究発表会	鳴門教育大学附属養護学校	17.2.10	徳島
１７	特総研セミナーⅡ	特殊教育総合研究所	17.2.23	東京
１８	自閉症児教育実践研究協議会	久里浜養護学校	17.2.25	神奈川
１９	自閉症児・者の就労支援を考えるシンポジューム	愛媛大学教育学部	17.2.26	愛媛
２０	学校心理士熊本県支部研修会	学校心理士熊本県支部	17.3.5	熊本市
２１	特別支援教育講座	明治安田こころの健康財団	17.3.12~13	東京

３　自閉症教育に関するアンケート調査

盲・聾・養護学校における自閉症の教育の調査について

このたび本校では、本校の児童生徒の障害特性に応じた指導を、より充実したものにするとともに、盲・聾・養護学校における自閉症の教育の現状と課題を探るため、対象の１７項に対して、県内調査を実施しました。調査用紙の様式（サンプル）、調査結果、考察について以下に示します。

（調査用紙の記入について）

① 調査用紙（A4 版両面刷り）は、工手別（盲学校、聾学校、肢体不自由養護学校、病弱養護学校、知的障害養護学校）と、学部別（幼稚部、小学部、中学部、後頭部）に作成してあります。それぞれの学部について記入してください。

② 後ほど、記述内容について、個別に問い合わせをすることが考えられますので、記入者氏名の記入をお願いします。

肢体不自由養護学校（小学部用）　サンプル

学校名　（　　）立　　学校

住　所　〒

電話番号

記入者名　　職名（学部主事等）

1　小学部の状況について

①　学部の在籍児童数について回答してください。学校に自閉症あるいは自閉症スペクトル障害（自閉的傾向、広汎性発達障害など）の児童がいますか。

（ア　いる　　イ　いない）

「いる」と回答した方は、以下の項目に回答してください。「いない」と回答した方は、これで終わりです。ありがとうございました。

②　学部の在籍者数（男女別）を記入してください。自閉症もしくは広汎性発達障害の診断のあるもの（アスペルガー症候群も含む）、学校の判断として自閉症の疑いのある自閉的傾向のあるものを分けて記入してください。

学部	小学部						
項目　学年	1	2	3	4	5	6	合計
男子児童数							
女子児童数							
自閉症の診断のある男子の数							
自閉症の診断のある女子の数							
自閉症が疑われる男子の数							
自閉症が疑われる女子の数							

以下の項目は、特に指定がない限り、自閉症もしくは広汎性発達障害の診断のある児童もしくは自閉症の疑いのある児童についての質問です。

③　実際のクラス、教員配置について、以下の内容の中で、学部の状況に合うものに一つだけ○印を付けてください。

ア　自閉症の児童が多く在籍するクラスでは、他の障害より多めに教員を配置している。

イ　自閉症で行動上の問題（自傷、他傷など）がある場合、多めに教員を配置している。

ウ　自閉症と他の障害とは変わらない教員の配置をしている。

エ　その他（　　）

④　自閉症教育に関する取組みについて、以下の内容の中で、現在の学部の状況に合うものに一つだけ○印を付けてください。

ア　自閉症教育については、必要な課題として学部全体で取り組んでいる。

イ　全体では取り組んではいないが、学年、クラス等で個別的に対応している。（場面の構造化や視覚的な情報の提示など）

ウ　今後、取り組むべき課題として検討している。

エ　特に自閉症に焦点化して取り組んではいない。

⑤　自閉症教育に関して、現在の学部の教職員の意識について、以下の中で当てはまるものに一つだけ○印を付けて

ください。

ア　指導には全体的に困難を感じている。
イ　指導には困難を感じることもあるが、個々の子どもによってさまざまである。
ウ　指導にはあまり困難は感じていない。
エ　指導には全く困難は感じていない。

⑥　⑤の設問でア、イに回答された方にお聞きします。自閉症の児童の指導について、困難を感じているのはどのような内容でしょうか。以下の中から特に困難を感じている内容を三つ選んで○印を付けてください。

ア　他障害の子どもと比べて、行動が理解しづらい。
イ　問題となる行動（突然のパニックなど）が多い。
ウ　一つの遊びに熱中し、他の内容に関心が向きにくい。
エ　集団活動になかなか参加しにくい。
オ　パターンが決まっていて、それらを崩しにくい。
カ　コミュニケーションがとりにくい。

その他、他障害の児童と比べて困難を感じている内容等があれば記述してください。

⑦　学部の全児童のうち、行動上の問題（自傷、他傷、物を壊す、パニック等）が著しい児童の概ねの割合を一つだけ選び、○印を付けてください。また、その中で自閉症の児童の占める割合について、当てはまるものを一つだけ選び、○印を付けてください。

〔行動上の問題のある全ての児童の割合〕

ア　２５%未満　　イ　２５%～４９%　　ウ　５０%～７４%　　エ　７５%以上

〔行動上の問題のある児童の中で、自閉症の児童の占める割合〕

ア　５０%未満　　イ　５０%～５９%　　ウ　６０%～６９%　　エ　７０%～７９%
オ　８０%～８９%　カ　９０%～９９%　　キ　１００%

２　学級編成、日課表、学校行事等について

上記のことについて、特に自閉症の児童に対して配慮・工夫している内容があれば具体的に記述してください。

3　指導内容・方法について

自閉症の児童に対して、実際に取り入れている指導方法・手法等があれば、下記の選択しに○印を付けてください。（複数回答可）特に自閉症の児童に対して配慮・工夫している内容があれば具体的に記述してください。

ア　精神分析的アプローチ　　イ　食事療法　　ウ　ファシリテイテッド・コミュニケーション
エ　聴覚トレーニング　　オ　感覚統合療法　　カ　だっこ法　　キ　オプションズ・セラピー
ク　音楽療法/芸術療法/ダンスセラピー　　ケ　TEACCH プログラム　　コ　応用行動分析
サ　動作法　　シ　その他

4　実態把握について

①　学部の全児童の実態把握として、実際に取り組んでいるものに一つだけ○印を付けてください。

ア　学部全体で実施している。
イ　学部全体では実施してないが、クラスや個人で実施しているケースもある。
ウ　実態把握は行っていない。

②　①の設問についてア、イに回答された方に質問します。実態把握をする時期と対象について、それぞれ当てはまるものに一つだけ○印を付けてください。

〔実施時期〕

ア　４月～５月頃の年度初めに実施している。
イ　一学期中には実施している。
ウ　年度の中で定期的に実施している。（６月と１１月など）

〔対　象〕

ア　全ての児童に対して毎年実施している。
イ　新入（転入）生にのみ実施している。
ウ　全ての児童に対して隔年で実施している。
エ　その他（　　）

③　児童の実態把握の方法として実施している内容に○印を付けてください。（複数回答可）

ア　検査を用いる。　　イ　保護者からの情報収集　　ウ　医師からの情報収集
エ　前担任からの情報　　オ　行動観察　　カ　チェックリストの使用

④　実態把握の方法で、特に自閉症教育にとって効果的なもの（検査法や行動観察など）があれば記述してください。

5　外部機関、学部、家庭等との連携

① 自閉症の児童の保護者との連携について、学部全体の認識としてあっているものに一つだけ○印を付けてください。

ア　自閉症に限らず保護者との連携は欠かせない。
イ　他障害に比べて保護者との連携の必要性は高い。
ウ　他障害に比べて連携の必要性は高くない。

② 自閉症の児童について、他機関等と連携している具体的な例があれば、記述してください。

〔連携先〕

実際に連携している他機関等について○印を付けてください。（複数回答可）

ア　大　学　　イ　教育センター　　ウ　自閉症・発達障害支援センター
エ　親の会　　オ　地域支援センター　　カ　療育センター　　キ　医療機関
ク　その他の機関（　　）

〔連携の具体例〕

③ 自閉症教育に関して、校内で実施している研修があれば、そのタイトル・内容等を記述してください。

④ 自閉症教育に関して、とても重要であると思われる研修の内容があれば、３つを上限として記述してください。

〔例〕自閉症の障害特性の理解、コミュニケーションの支援方法、構造化の手だて等

御協力ありがとうございました。

※　該当なし：盲学校、松橋養、松橋東養、芦北養、苓北養

1　小学部の状況について

①　学部の在籍児童数について回答してください。学校に自閉症あるいは自閉症スペクトル障害（自閉的傾向、広汎性発達障害など）の児童がいますか。

（ア　いる　　イ　いない）　ア　解答　１２校
イ　解答　５校

「いる」と回答した方は、以下の項目に回答してください。「いない」と回答した方は、これで終わりです。ありがとうございました。

②　学部の在籍者数（男女別）を記入してください。自閉症もしくは広汎性発達障害の診断のあるもの（アスペルガー症候群も含む）、学校の判断として自閉症の疑いのある自閉的傾向のあるものを分けて記入してください。

学部	小学部							
項目　学年	1	2	3	4	5	6	合計	
男子児童数							161	
女子児童数							81	
自閉症の診断のある男子の数							64	39,75 %
自閉症の診断のある女子の数							8	9.88 %
自閉症が疑われる男子の数							14	8,70 %
自閉症が疑われる女子の数							4	4,94 %

以下の項目は、特に指定がない限り、自閉症もしくは広汎性発達障害の診断のある児童もしくは自閉症の疑いのある児童についての質問です。

③　実際のクラス、教員配置について、以下の内容の中で、学部の状況に合うものに一つだけ○印を付けてください。
ア　自閉症の児童が多く在籍するクラスでは、他の障害より多めに教員を配置している。　(1)
イ　自閉症で行動上の問題（自傷、他傷など）がある場合、多めに教員を配置している。　(2)
ウ　自閉症と他の障害とは変わらない教員の配置をしている。　(7)
エ　その他（　　）　(1)

④　自閉症教育に関する取組みについて、以下の内容の中で、現在の学部の状況に合うものに一つだけ○印を付けてください。
ア　自閉症教育については、必要な課題として学部全体で取り組んでいる。　(3)
イ　全体では取り組んではいないが、学年、クラス等で個別的に対応している。（場面の構造化や視覚的な情報の提示など）　(7)
ウ　今後、取り組むべき課題として検討している。　(0)
エ　特に自閉症に焦点化して取り組んではいない。　(2)

⑤　自閉症教育に関して、現在の学部の教職員の意識について、以下の中で当てはまるものに一つだけ○印を付けてください。
ア　指導には全体的に困難を感じている。　(0)
イ　指導には困難を感じることもあるが、個々の子どもによってさまざまである。　(10)
ウ　指導にはあまり困難は感じていない。　(1)
エ　指導には全く困難は感じていない。　(0)

⑥　⑤の設問でア、イに回答された方にお聞きします。自閉症の児童の指導について、困難を感じているのは　どのような内容でしょうか。以下の中から特に困難を感じている内容を三つ選んで○印を付けてください。　ア　他障害の子どもと比べて、行動が理解しづらい。　(4)

イ　問題となる行動（突然のパニックなど）が多い。　(5)
ウ　一つの遊びに熱中し、他の内容に関心が向きにくい。　(1)
エ　集団活動になかなか参加しにくい。　(4)
オ　パターンが決まっていて、それらを崩しにくい。　(5)
カ　コミュニケーションがとりにくい。　(10)
その他、他障害の児童と比べて困難を感じている内容等があれば記述してください。

・コミュニケーションは、多くの場合単語レベルではあるが、抽象的な表現（過去、未来、たとえ話、別の場所）が理解しにくい。
・「どうして？」など理由や道理についての理解や説明が難しい。（聾）

⑦　学部の全児童のうち、行動上の問題（自傷、他傷、物を壊す、パニック等）が著しい児童の概ねの割合を 一つだけ選び、○印を付けてください。また、その中で自閉症の児童の占める割合について、当てはまるものを一つだけ選び、○印を付けてください。

〔行動上の問題のある全ての児童の割合〕
ア　２５%未満　(11)　イ　２５%～４９%　(1)　ウ　５０%～７４%　(0)　エ　７５%以上　(0)
〔行動上の問題のある児童の中で、自閉症の児童の占める割合〕
ア　５０%未満(4)　イ　５０%～５９%(0)　ウ　６０%～６９%(1)　エ　７０%～７９%(0)
オ　８０%～８９%(2)　カ　９０%～９９%(0)　キ　１００%　(4)

2　学級編成、日課表、学校行事等について

上記のことについて、特に自閉症の児童に対して配慮・工夫している内容があれば具体的に記述してください。

・子どもにとって見通しが着くように、生単を中心に教育課程を編成している。２時間、３時間連続した時間割を作成している。（聾）
・学級編成においては、特配をお願いし、安全面での配慮をしている。（天）
・日課表等、教育活動全般においては、生活のリズムや学習環境を整えるようにしている。（天）
（見通しの持たせ方、生活のパターン化、コミュニケーションボード等の工夫）
・個々の実態に合わせて、行事全般への参加方法等を検討し合い、児童が楽しく参加できるよう様々な視点（環境面、人的関わりの面等）から配慮する。（天）
・日課表は基本的には同じ。学級の中で、あるいは個別に１日のスケジュール、流れを工夫している。（松西）
・学校行事、社会見学、遠足、宿泊学習などの行事や普段の活動と、日課や活動内容が異なる場合は、事前に写真カードなどで伝える。（松西）
・卒業式、入学式では、歩くライン、停まる場所など、わかりやすく示している。（松西）
・スケジュールを、写真・絵・文字を使って一人一人に合った方法で示すようにしている。（小）
・物理的構造化・視覚的構造化を取り組んでいる。（小）
・１日、１週間の生活に見通しをもてるよう、帯状の時間割を設定している。（菊）
・一定期間、学校生活にテーマを設ける。（菊）
・コミュニケーション等を課題とした、個別の学習時間を設定している。（菊）
・クラスで使う日課表の他に、写真カードを使って次の時間の学習内容等を知らせるようにしている。（球）
・毎日の日課と流れが変わりやすい学校行事等では、本人のペースを大切にしながら、無理なく参加できることを心がけて支援している。（球）
・日課は、見通しが持てるように帯状、朝の会等で文字・写真カードを使い、スケジュールを確認。（荒）
・児童によっては、個人用のスケジュールカードやコミュニケーションカードを用意している。（荒）
・本人だけのスケジュール表の作成等。（附）

・１日のスケジュールの確認（カードの活用、文字カードと写真カード etc）（八）
・自閉症の子どもに限らず、わかりやすい日課にしている。（八）

3　指導内容・方法について

自閉症の児童に対して、実際に取り入れている指導方法・手法等があれば、下記の選択しに○印を付けてください。（複数回答可）特に自閉症の児童に対して配慮・工夫している内容があれば具体的に記述してください。

ア　精神分析的アプローチ　　イ　食事療法　　ウ　ファシリテイテッド・コミュニケーション
エ　聴覚トレーニング　　オ　感覚統合療法(1)　カ　だっこ法　　キ　オプションズ・セラピー
ク　音楽療法/芸術療法/ダンスセラピー(1)　ケ　TEACCH プログラム(6)　コ　応用行動分析
サ　動作法(1)　シ　その他(1)

・写真と絵を積極的に取り入れたり、教科学習等についてもできるだけ生単等の体験学習を絡めてするように心がけている。（聾）
・特にこれというのではなく、いろいろな内容が複合し合った物を、児童の実態を見ながら TPO に合わせて行っている。（天）
・視覚的な手がかりやスケジュールカードを活用している。（菊）
・意思伝達のためのカードを用いる。（菊）
・情報機器を活用した学習を行う。（菊）
・太田ステージプログラムを参考として個別の課題学習を準備している。（球）
・芦北学園でされている言語訓練 PECS を子どもと関わる上で活用している。（球）
・わかりやすい、視覚的教材の工夫を行っている。終了の明確化。（荒）
・子どもと共に活動し、共感的な関係作りをする。家庭との情報交換。支援の共通化。（荒）

4　実態把握について

①　学部の全児童の実態把握として、実際に取り組んでいるものに一つだけ○印を付けてください。

ア　学部全体で実施している。　(11)
イ　学部全体では実施してないが、クラスや個人で実施しているケースもある。　(0)
ウ　実態把握は行っていない。　(1)

②　①の設問についてア、イに回答された方に質問します。実態把握をする時期と対象について、それぞれ当てはまるものに一つだけ○印を付けてください。

〔実施時期〕
ア　４月～５月頃の年度初めに実施している。　(9)
イ　一学期中には実施している。　(0)
ウ　年度の中で定期的に実施している。（６月と１１月など）　(3)

〔対　象〕
ア　全ての児童に対して毎年実施している。　(9)
イ　新入（転入）生にのみ実施している。　(0)
ウ　全ての児童に対して隔年で実施している。　(0)
エ　その他（　　）　(1)

③　児童の実態把握の方法として実施している内容に○印を付けてください。（複数回答可）

ア　検査を用いる。(7)　イ　保護者からの情報収集(11)　ウ　医師からの情報収集(7)
エ　前担任からの情報（10）　オ　行動観察(8)　カ　チェックリストの使用(1)

④　実態把握の方法で、特に自閉症教育にとって効果的なもの（検査法や行動観察など）があれば、記述してください。

・もちろん、どの方法もそれぞれに効果はあると思うが、強いて言うと行動観察。自閉症に限らず、個々の実態とニーズが違えば、同じ障害であっても関わり方が違ってくる。また、子どもの成長に伴い、行動面での変化を見られる。(天)
・PEP－R が効果的と考え研修中。(松西)
・各種の発達検査。(小)
・PEP－R、K－ABC (菊)
・太田ステージ評価表 (球)
・行動観察、PEP－R

5　外部機関、学部、家庭等との連携

① 自閉症の児童の保護者との連携について、学部全体の認識としてあっているものに一つだけ○印を付けてください。

ア　自閉症に限らず保護者との連携は欠かせない。　(6)
イ　他障害に比べて保護者との連携の必要性は高い。　(0)
ウ　他障害に比べて連携の必要性は高くない。　(0)

② 自閉症の児童について、他機関等と連携している具体的な例があれば、記述してください。

〔連携先〕
実際に連携している他機関等について○印を付けてください。(複数回答可)

ア　大　学　　イ　教育センター　　ウ　自閉症・発達障害支援センター(1)
エ　親の会　　オ　地域支援センター　　カ　療育センター(1)　キ　医療機関(1)
ク　その他の機関 (　　)

〔連携の具体例〕

③ 自閉症教育に関して、校内で実施している研修があれば、そのタイトル・内容等を記述してください。

・熊大発達小児科のドクターを招いての研修会、講話「発達障害の理解と対応」「アスペルガー症候群について」(松西)
・検査法研修、PEP－R の検査法、分析について (対象は、小中学部より数名) (松西)
・発達支援センターの講座に参加した職員の研修報告会 (対象は、小学部職員) (松西)
・夏季校内研修「自閉症について」「発達検査について」自閉症に関する講話 (土肥先生、岡田先生) (菊)
・自閉症教育実践ガイドブック (特総研) をテキストにした研修会 (荒)

④ 自閉症教育に関して、とても重要であると思われる研修の内容があれば、３つを上限として記述してください。
〔例〕自閉症の障害特性の理解、コミュニケーションの支援方法、構造化の手だて等

・自閉症の障害特性の理解 (聾) (松西) (小) (球) (荒) (附)
・自閉症の指導方法・内容 (聾)
・構造化の実際について、応用行動分析 (松西)
・コミュニケーションの指導法、TEACCH の考え方と取り組みについて (小)
・ACC 等コミュニケーション支援、児童生徒理解のためのアセスメント (実技を含む) (菊)
・具体的な教材作成と活用 (菊)
・認知発達についての理解 (球)
・パニックへの対応 (荒)
・高機能自閉症等の学習 (附)
・自閉症教育という表現及び内容が治療教育とならないように願っています。(熊)

※　該当なし：盲学校、松東養、苓北養、芦北養、天草養、松橋養

1　中学部の状況について

①　学部の在籍生徒数について回答してください。学校に自閉症あるいは自閉症スペクトル障害（自閉的傾向、広汎性発達障害など）の生徒がいますか。

（　ア　いる　　イ　いない）　ア　解答　１１校
イ　解答　６校

「いる」と回答した方は、以下の項目に回答してください。「いない」と回答した方は、これで終わりです。ありがとうございました。

②　学部の在籍者数（男女別）を記入してください。自閉症もしくは広汎性発達障害の診断のあるもの（アスペルガー症候群も含む）、学校の判断として自閉症の疑いのある自閉的傾向のあるものを分けて記入してください。

学部	中　学　部				
項　目　　学年	1	2	3	合　計	
男子生徒数				142	
女子生徒数				76	
自閉症の診断のある男子の数				47	33,10 %
自閉症の診断のある女子の数				7	9,21 %
自閉症が疑われる男子の数				3	2,11 %
自閉症が疑われる女子の数				1	1,32 %

以下の項目は、特に指定がない限り、自閉症もしくは広汎性発達障害の診断のある生徒もしくは自閉症の疑いのある生徒についての質問です。

③　実際のクラス、教員配置について、以下の内容の中で、学部の状況に合うものに一つだけ○印を付けてください。
ア　自閉症の生徒多く在籍するクラスでは、他の障害より多めに教員を配置している。　(0)
イ　自閉症で行動上の問題（自傷、他傷など）がある場合、多めに教員を配置している。　(1)
ウ　自閉症と他の障害とは変わらない教員の配置をしている。　(9)
エ　その他（　　）　(1)

④　自閉症教育に関する取組みについて、以下の内容の中で、現在の学部の状況に合うものに一つだけ○印を付けてください。
ア　自閉症教育については、必要な課題として学部全体で取り組んでいる。　(5)
イ　全体では取り組んではいないが、学年、クラス等で個別的に対応している。（場面の構造化や視覚的な情報の提示など）　(5)
ウ　今後、取り組むべき課題として検討している。　(0)
エ　特に自閉症に焦点化して取り組んではいない。　(1)

⑤　自閉症教育に関して、現在の学部の教職員の意識について、以下の中で当てはまるものに一つだけ○印を付けてください。
ア　指導には全体的に困難を感じている。　(3)
イ　指導には困難を感じることもあるが、個々の子どもによってさまざまである。　(6)
ウ　指導にはあまり困難は感じていない。　(2)
エ　指導には全く困難は感じていない。　(0)

⑥　⑤の設問でア、イに回答された方にお聞きします。自閉症の生徒指導について、困難を感じているのはどのような内容でしょうか。以下の中から特に困難を感じている内容を三つ選んで○印を付けてください。
ア　他障害の子どもと比べて、行動が理解しづらい。　(3)

イ　問題となる行動（突然のパニックなど）が多い。　(5)
ウ　一つの遊びに熱中し、他の内容に関心が向きにくい。　(0)
エ　集団活動になかなか参加しにくい。　(8)
オ　パターンが決まっていて、それらを崩しにくい。　(3)
カ　コミュニケーションがとりにくい。　(7)
その他、他障害の生徒比べて困難を感じている内容等があれば記述してください。

⑦　学部の全生徒うち、行動上の問題（自傷、他傷、物を壊す、パニック等）が著しい生徒概ねの割合を一つだけ選び、○印を付けてください。また、その中で自閉症の生徒の占める割合について、当てはまるものを一つだけ選び、○印を付けてください。

〔行動上の問題のある全ての生徒の割合〕

ア	イ	ウ	エ
２５%未満	２５%～４９%	５０%～７４%	７５%以上
(7)	(3)	(0)	(0)

〔行動上の問題のある生徒の中で、自閉症の生徒の占める割合〕

ア	イ	ウ	エ
５０%未満	５０%～５９%	６０%～６９%	７０%～７９%
(5)	(1)	(1)	(0)

オ	カ	キ
８０%～８９%	９０%～９９%	１００%
(0)	(0)	(3)

２　学級編成、日課表、学校行事等について

上記のことについて、特に自閉症の生徒に対して配慮・工夫している内容があれば具体的に記述してください。

・重複学級在籍、朝の会、帰りの会、朝自習、道徳、HR は親学級で活動。担当者はマン・ツー・マン体制。（聾）
・学部全体で支援体制を整えて対応。病弱部には、プレクラス（個別対応クラス）を用意し、学習時日常生活全般、行事等々、不安定な状態時に対応できるようにしている。（黒）
・病弱部は、基本的に準じる教育課程の編成。（黒）
・学級編成では、特に自閉症に特化した編成にしていないため、教室環境や活動内容を構造化し、より取り組みやすい環境作りにつとめている。（松西）
・見通しの持ちにくい生徒については、個々にスケジュール帳を作成したり、タイマーを使ったり、より細やかな手立てをすると共に、学部会でも生徒の様子について紹介し合い、共通理解を図るようにしている。
・手立てという面で、子ども総合療育センターや熊大教育学部特殊教育課の支援を仰ぎ、定期的にケース会議を開き、職員の研修に努めている。（松西）
・帯状日課、儀式的行事は短めに、作業学習中心の教育課程。（小）
・写真カード、文字カードを使って一日の流れが理解できるようにしている。（菊）
・特に自閉症の生徒のために、学級編成、日課表、学校行事等合わせていない。本人達が集団に入れないときは、無理に入れることがないように配慮している。（球）
・学級編成をするときは、障害が偏らないように配慮している。（荒）
・日課は、見通しが立ちやすいように帯状にし、日課の変更は事前に話し説明する。（荒）
・日課は、写真カードやシンボル化した物で示す。（荒）
・学校行事（校外に出かけるときは特に）目的地等を写真で知らせておく。（荒）
・場面の構造化、視覚提示（絵カード、文字カード等）具体的提示。（附）
・少人数なので、学部３名を１クラスにしての学級指導をしている。日課表については、体を動かすことで、精神面が安定することや、食事を安定して摂ることもあり、チャレンジタイム（７分間走）を火曜日から金曜日まで帯状に取っている。（八）
・外部へでての学校行事では、その場所になれるために、現場に到着するとすぐに、歩いてみて回り、場所の把握をして、行事の参加を行っている。（八）

・日程や学習については、分かりやすいように構造化をしている。(八)
・全ての生徒に分かりやすい日課、生活となるよう工夫している。(熊)
・１日の日程、スケジュールが分かりやすいように、カード（絵、写真、文字）で示す。(大)
・カードで意思表示ができるようにする。(大)

3　指導内容・方法について

自閉症の生徒に対して、実際に取り入れている指導方法・手法等があれば、下記の選択しに○印を付けてください。（複数回答可）特に自閉症の生徒に対して配慮・工夫している内容があれば具体的に記述してください。

ア　精神分析的アプローチ　　イ　食事療法　　ウ　ファシリテイテッド・コミュニケーション
エ　聴覚トレーニング　　オ　感覚統合療法(1)　カ　だっこ法(1)　キ　オプションズ・セラピー
ク　音楽療法/芸術療法/ダンスセラピー　　ケ　TEACCH プログラム(5)　コ　応用行動分析(2)
サ　動作法(5)　シ　その他

・ADHD から自閉傾向で服薬中、睡眠障害、情緒不安定の生徒で、パニック時、ゆっくりとした雰囲気の中で　落ち着くのを待つ。療育センターを利用（保護者との連携）(聾)
・マン・ツー・マンで本人にあって教材を使用している。(荒)
・自閉症に限らず、一人一人の生徒の状況に沿って、指導方法等の工夫を心がけている。(熊)

4　実態把握について

①　学部の全生徒の実態把握として、実際に取り組んでいるものに一つだけ○印を付けてください。

ア　学部全体で実施している。　(11)
イ　学部全体では実施してないが、クラスや個人で実施しているケースもある。　(0)
ウ　実態把握は行っていない。　(0)

②　①の設問についてア、イに回答された方に質問します。実態把握をする時期と対象について、それぞれ当てはまるものに一つだけ○印を付けてください。

〔実施時期〕
ア　４月～５月頃の年度初めに実施している。　(5)
イ　一学期中には実施している。　(2)
ウ　年度の中で定期的に実施している。(６月と１１月など)　(4)

〔対　象〕
ア　全ての生徒に対して毎年実施している。　(10)
イ　新入（転入）生にのみ実施している。　(0)
ウ　全ての生徒に対して隔年で実施している。　(1)
エ　その他（　　）　(0)

③　生徒の実態把握の方法として実施している内容に○印を付けてください。(複数回答可)
ア　検査を用いる。(3)　イ　保護者からの情報収集(11)　ウ　医師からの情報収集(6)
エ　前担任からの情報(11)　オ　行動観察(10)　カ　チェックリストの使用(2)

④　実態把握の方法で、特に自閉症教育にとって効果的なもの(検査法や行動観察など)があれば、記述してください。

・WISC－R、K－ABC、PECS 等（黒）　・PEP－R の実施について検討中（松西）
・一人一人の行動特性や認知の特性は様々で、基本的には、行動観察の方が特性を細かくつかみやすいと思う。補助的には、検査（PEP－R など）の結果も参考になると思う。(小)

・行動観察、PEP－R（本校では実施していない）（荒）　・動議づけ評定尺度（MAS）（大）

5　外部機関、学部、家庭等との連携

① 自閉症の生徒の保護者との連携について、学部全体の認識としてあっているものに一つだけ○印を付けてください。

ア　自閉症に限らず保護者との連携は欠かせない。　(4)
イ　他障害に比べて保護者との連携の必要性は高い。　(0)
ウ　他障害に比べて連携の必要性は高くない。　(0)

② 自閉症の生徒について、他機関等と連携している具体的な例があれば、記述してください。

〔連携先〕

実際に連携している他機関等について○印を付けてください。（複数回答可）

ア　大　学(1)　イ　教育センター(0)　ウ　自閉症・発達障害支援センター(1)
エ　親の会(1)　オ　地域支援センター(0)　カ　療育センター(0)　キ　医療機関(3)
ク　その他の機関（　　）(1)

〔連携の具体例〕

・発達小児科定期受診（中１・１０月から）（聾）
・支援上、気になる生徒について、センターの方のアドバイスを受けたり、保護者を交えて相談したりして今後の支援に生かす。(大)
・てんかん発作の状況、障害特性等について、養護教諭同席のもと、主治医と面談をする。(大)

③ 自閉症教育に関して、校内で実施している研修があれば、そのタイトル・内容等を記述してください。

・ケース研修会（黒）
・学部研修として、構造化のことや、行動分析について研修した。(松西)
・「動作法」「TEACCH の基礎」「行動障害のとらえ方と具体的な対応」「自閉症の精神学的、医学的側面からの理解と対応」「発達検査方法（PEP－R、K－ABC、WISC－Ⅲ）(小)
・自閉症教育実践ガイドブック（特総研）をテキストにした部研修会。(荒)

④ 自閉症教育に関して、とても重要であると思われる研修の内容があれば、３つを上限として記述してください。〔例〕自閉症の障害特性の理解、コミュニケーションの支援方法、構造化の手だて等

・自閉症の障害特性の理解、保護者との連携、諸機関との連携。(聾)
・自閉症のある生徒の理解と具体的な支援、個別の指導計画の作成。(黒)
・自閉症の障害特性の理解と構造化、コミュニケーションを高めるための具体的な支援方法、パニック等を含めた行動面へのアプローチ方（松西）
・自閉症の障害特性、自閉症の対応の基本、自閉症の進路について。(小)
・自閉症の障害特性、パニック時の対応、コミュニケーションについて（球）
・事例研を行い、生徒一人一人について学部で指導方針の手立てを共通理解し、意思疎通して指導に当たる。（荒）
・自閉症児童生徒の発達特性（高機能、アスペルガーを含む）、構造化の手立て、概念形成の支援方法（附）
・構造化の手立て、コミュニケーションの支援方法（ソーシャルスキルトレーニングの方法）、感覚統合療法（八）
・自閉症という障害概念にとらわれない、人としての特性に目を向けた教育観を持って関わっていきたいと考える。(それぞれの障害特性はもちろん研修すべきであるが。)（熊）

※　該当なし　聾学校、芦北養、球磨養、八代養

1　高等部の状況について

①　学部の在籍生徒数について回答してください。学校に自閉症あるいは自閉症スペクトル障害（自閉的傾向、広汎性発達障害など）の生徒がいますか。

（　ア　いる　　イ　いない）　ア　解答　１３校
イ　解答　　４校

「いる」と回答した方は、以下の項目に回答してください。「いない」と回答した方は、これで終わりです。ありがとうございました。

②　学部の在籍者数（男女別）を記入してください。自閉症もしくは広汎性発達障害の診断のあるもの（アスペルガー症候群も含む）、学校の判断として自閉症の疑いのある自閉的傾向のあるものを分けて記入してください。

学部	高等部				
項目　学年	1	2	3	合計	
男子生徒数				331	
女子生徒数				181	
自閉症の診断のある男子の数				72	21,75 %
自閉症の診断のある女子の数				14	7,73 %
自閉症が疑われる男子の数				26	7,85 %
自閉症が疑われる女子の数				11	6,08 %

以下の項目は、特に指定がない限り、自閉症もしくは広汎性発達障害の診断のある生徒もしくは自閉症の疑いのある生徒についての質問です。

③　実際のクラス、教員配置について、以下の内容の中で、学部の状況に合うものに一つだけ○印を付けてください。

ア　自閉症の生徒多く在籍するクラスでは、他の障害より多めに教員を配置している。　(1)
イ　自閉症で行動上の問題（自傷、他傷など）がある場合、多めに教員を配置している。　(1)
ウ　自閉症と他の障害とは変わらない教員の配置をしている。　(8)
エ　その他（　　）　(2)

④　自閉症教育に関する取組みについて、以下の内容の中で、現在の学部の状況に合うものに一つだけ○印を付けてください。

ア　自閉症教育については、必要な課題として学部全体で取り組んでいる。　(2)
イ　全体では取り組んではいないが、学年、クラス等で個別的に対応している。（場面の構造化や視覚的な情報の提示など）　(7)
ウ　今後、取り組むべき課題として検討している。　(1)
エ　特に自閉症に焦点化して取り組んではいない。　(1)

⑤　自閉症教育に関して、現在の学部の教職員の意識について、以下の中で当てはまるものに一つだけ○印を付けてください。

ア　指導には全体的に困難を感じている。　(1)
イ　指導には困難を感じることもあるが、個々の子どもによってさまざまである。　(10)
ウ　指導にはあまり困難は感じていない。　(1)
エ　指導には全く困難は感じていない。　(0)

⑥　⑤の設問でア、イに回答された方にお聞きします。自閉症の生徒指導について、困難を感じているのはどのような内容でしょうか。以下の中から特に困難を感じている内容を三つ選んで○印を付けてください。

ア　他障害の子どもと比べて、行動が理解しづらい。　(9)
イ　問題となる行動（突然のパニックなど）が多い。　(7)

ウ　一つの遊びに熱中し、他の内容に関心が向きにくい。　(1)
エ　集団活動になかなか参加しにくい。　(5)
オ　パターンが決まっていて、それらを崩しにくい。　(2)
カ　コミュニケーションがとりにくい。　(4)
その他、他障害の生徒比べて困難を感じている内容等があれば記述してください。

・落ち着かず自傷がある。（盲）
・コミュニケーションに含まれるが、他者の感情を理解することの難しさ。自己理解。（ひ）
・原因が特定できないが、他傷のある子どもから他の生徒を守る（安全面の確保）ことと、良い人間関係を築いていくことについての指導。（荒）

⑦　学部の全生徒うち、行動上の問題（自傷、他傷、物を壊す、パニック等）が著しい生徒の概ねの割合を一つだけ選び、○印を付けてください。また、その中で自閉症の生徒の占める割合について、当てはまるものを一つだけ選び、○印を付けてください。

〔行動上の問題のある全ての生徒の割合〕
ア　２５%未満(11)　イ　２５%～４９%(1)　ウ　５０%～７４%(0)　エ　７５%以上(0)

〔行動上の問題のある生徒の中で、自閉症の生徒の占める割合〕
ア　５０%未満(7)　イ　５０%～５９%(1)　ウ　６０%～６９%(2)　エ　７０%～７９%(0)
オ　８０%～８９%(0)　カ　９０%～９９%(0)　キ　１００%(2)

２　学級編成、日課表、学校行事等について

上記のことについて、特に自閉症の生徒に対して配慮・工夫している内容があれば具体的に記述してください。

・集団学習への参加に無理のないように。（盲）
・マン・ツー・マンの個別の対応、対応の仕方については、学部会で検討し、共通理解を持つ。（苓）
・自傷行為については、他の生徒とは異なる、ゆっくりとした流れの活動で対応する。（苓）
・本人に会うコース及び学習内容を配慮する。（黒）
・行事等については、できるだけ事前に内容等を知らせておく。（天）
・自閉症の生徒だけに対する特別な学級編成や日課、学校行事等は実施していない。（ひ）
・学級編成、教員の配置以外は特別高じては居ない。（１学年２学級ずつあるので、人数的にはバランス程度）（松西）
・日課表については、全体的な流れに相違はないが、個別対応の時間を多く設定し、生徒の状況に応じた教材や、コミュニケーションの取り方などの工夫をしている。（松西）
・学校行事では、特に見通しの持ちにくい生徒については、担任の支援法を尊重し、職員全体で共通理解を図って、取り組むようにしている。（松西）
・個に応じたスケジュールボードを使って、その日の流れ、時間の経過を分かりやすくなるように工夫している。（小）
・集団学習に参加しにくい場合は、無理に参加させず、落ち着く場所で過ごすようにしている。（小）
・学級編成では、障害が偏らないように配慮している。（自閉症に限らず。）（球）
・日課は、見通しが立ちやすいように帯状にし、日課の変更は事前に話し、説明する。（荒）
・学校行事（校外に出かけるときは特に）では、目的地等を写真等で知らせておく。（荒）
・日程等の視覚的情報呈示、情報呈示のタイミング、具体物の呈示。（附）
・特に自閉症の生徒に限った対応はしていない。全ての子どもにとって分かりやすい日課となるよう工夫している。（熊）

３　指導内容・方法について

自閉症の生徒に対して、実際に取り入れている指導方法・手法等があれば、下記の選択しに○印を付けてく

ださい。（複数回答可）特に自閉症の生徒に対して配慮・工夫している内容があれば具体的に記述してください。

ア　精神分析的アプローチ　　イ　食事療法　　ウ　ファシリテイテッド・コミュニケーション
エ　聴覚トレーニング　　オ　感覚統合療法　　カ　だっこ法　　キ　オプションズ・セラピー
ク　音楽療法/芸術療法/ダンスセラピー(1)　ケ　TEACCH プログラム(3)　コ　応用行動分析(2)
サ　動作法(4)　シ　その他(2)

・不安をなくし、落ち着いた行動ができるように指導している。（盲）
・生徒によっては、視覚的な情報の提示を行っている。（ひ）
・大学と連携し、取り組みを始めた段階である。（松西）
・マン・ツー・マンで本人に合った教材を使用し、課題を準備して、コミュニケーションの指導及び、主に教科の学習を行っている。（球）
・個別にサインを用いたコミュニケーションアプローチをする場合もあるが、特に自閉症だからと意識していない。（マカトン法）（附）
・特に技法等を取り入れ、プログラム化していない。個人や場面に応じた対応に心がけている。（熊）

4　実態把握について

①　学部の全生徒の実態把握として、実際に取り組んでいるものに一つだけ○印を付けてください。

ア　学部全体で実施している。　(9)
イ　学部全体では実施してないが、クラスや個人で実施しているケースもある。　(2)
ウ　実態把握は行っていない。　(1)

②　①の設問についてア、イに回答された方に質問します。実態把握をする時期と対象について、それぞれ当てはまるものに一つだけ○印を付けてください。

〔実施時期〕
ア　４月～５月頃の年度初めに実施している。　(6)
イ　一学期中には実施している。　(3)
ウ　年度の中で定期的に実施している。（６月と１１月など）　(1)
（エ　学期始め：荒尾養）　(1)

〔対　象〕
ア　全ての生徒に対して毎年実施している。　(7)
イ　新入（転入）生にのみ実施している。　(1)
ウ　全ての生徒に対して隔年で実施している。　(0)
エ　その他（　　）　(1)

③　生徒の実態把握の方法として実施している内容に○印を付けてください。（複数回答可）

ア　検査を用いる。(5)　イ　保護者からの情報収集(10)　ウ　医師からの情報収集(4)
エ　前担任からの情報(10)　オ　行動観察(9)　カ　チェックリストの使用(2)

④　実態把握の方法で、特に自閉症教育にとって効果的なもの（検査法や行動観察など）があれば、記述してください。

・PEP－R（菊）　・PEP－R　WISC－Ⅲ　行動観察（小）　・WISC－Ⅲ K－ABC（黒）
・PEP－R　行動観察（荒）　・PEP－R（松西）

5　外部機関、学部、家庭等との連携

①　自閉症の生徒の保護者との連携について、学部全体の認識としてあっているものに一つだけ○印を付けてください。

ア　自閉症に限らず保護者との連携は欠かせない。　(4)
イ　他障害に比べて保護者との連携の必要性は高い。　(2)
ウ　他障害に比べて連携の必要性は高くない。　(0)

② 自閉症の生徒について、他機関等と連携している具体的な例があれば、記述してください。
〔連携先〕
実際に連携している他機関等について○印を付けてください。(複数回答可)
ア　大　学(1)　イ　教育センター　ウ　自閉症・発達障害支援センター
エ　親の会(1)　オ　地域支援センター　カ　療育センター　キ　医療機関(2)
ク　その他の機関（　）(1)ライトハウス児童福祉施設
〔連携の具体例〕

・行動分析の専門家と連携し、取り組みを始めた。(松西)
・ケース会議（月１回）受け、学部研修会を開き自閉症への研修を深めた。単発的な取り組みではなく、長いスパンでケース会議を開いていくことを確認している。(松西)
・通っているDr（精神科）より所見を伺い、指導に役立てている。(荒)
・継続した連携としては、医師による定期的な検診を受ける程度。(附)
・自閉症の生徒に限らず、必要に応じてその生徒の主治医と面談を行い、支援上必要な情報の交換を行っている。(ひ)
・生徒の掛かり付けの医療機関に相談することがある。(小)
・県自閉症・発達障害支援センターの相談員の方との事例相談。生徒の担当医師との事例相談。(菊)

③ 自閉症教育に関して、校内で実施している研修があれば、そのタイトル・内容等を記述してください。

・ケース会の実施。(黒)
・学期ごとの「個別の指導計画」作成後、事例検討会を実施し、自閉的傾向のある生徒等についても共通理解とその支援法について研修をしている。(松西)
・自閉症教育実践ガイドブック（特総研）をテキストにした部研修会を実施。(荒)
・昨年度、本校職員を講師として「TEACCHプログラムの概要」の研修を行った。(附)
・校長講話「生徒理解について」本校生徒についての理解の在り方について研修を行う中で、自閉症を始め広汎性発達障害について、定義やスクリーニング等の研修を行った。(ひ)
・「動作法」「TEACCH の基礎」「行動障害のとらえ方と具体的な対応」「自閉症の精神学的・医学的側面からの理解と対応」発達検査法（PEP－R 、K－ABC、WISC－Ⅲ）(小)

④ 自閉症教育に関して、とても重要であると思われる研修の内容があれば、３つを上限として記述してください。
〔例〕自閉症の障害特性の理解、コミュニケーションの支援方法、構造化の手だて等

・自閉症の障害特性の理解。(盲)(苓)(ひ)(小)
・コミュニケーションの力を高める手立て。(盲)
・効果的な指導方法の工夫。　実態把握の方法。(苓)
・卒業後の生活について（進路を含む)。性の問題について。(黒)
・効果的な支援の在り方。　就労支援の方法。(ひ)
・自傷及び他傷行為のある生徒の適切な支援方法。障害特性にあった、効果的なコミュニケーションの取り方。自閉症学級設置校における日課表の作成や、教材等への取り組み。(松西)
・TEACCH プログラムのアイディア全般。　行動分析（小)
・自閉症児の理解や指導方法の実際。(菊)
・事例研を行い、生徒一人一人について、部（必要があれば学校全体）で指導方針と手だてを共通理解し意思統一して指導に当たるようにしている。(荒)
・障害特性の理解とそれをもとにした支援について。(附)

○　自閉症の児童の状況について（小学部）アンケート結果より

１７校中、１２校に自閉症の児童が在籍し、５校には在籍しないことが分かった。

男女の比率を見てみると、絶対数においても、自閉症児の比率においても遙かに男子が女子を上回り、在籍数に対する自閉症児（疑いも含む）の割合は、男子３２．２３％、女子４．９６％であった。教員の配置では、他の障害と変わらない配置との回答が、６３．６４％であり、自閉症教育の取り組みについては、全体では取り組んではいないが、学年、クラス等で個別的に対応しているとの回答が５８．３３％だった。教職員の意識面では、「指導には困難を感じることもあるが、個々の子どもによって様々」の回答が９０．９１％と圧倒的だった。指導に困難を感じることの内容では、コミュニケーションが取りにくいとの回答が多く、具体的な例として、抽象的な表現（過去、未来、たとえ話など）が理解しにくいし、「どうして？」など理由や道理についての理解や説明が難しいなどがあがっている。行動上の問題（自傷、他傷、物を壊す、パニック等）が著しい児童の概ねの割合では、２５％未満の回答が９１．６７％だった。

学級編成、日課表、学校行事等についての設問への回答では、連続コマでの日課など生活のリズムや学習環境を整えるなどの工夫、本人だけのスケジュール表を作ったりなど見通しが持てるような工夫、写真カードや文字カード等の視覚に訴える教材を活用する等の工夫点が上げられている。

指導内容・方法に関しての回答では、TEACCH プログラムを使用している学校が６校あった。その他では、感覚統合療法、音楽療法、動作法を取り入れている学校もそれぞれ１校づつあった。視覚的な手がかりやスケジュールカードなどの活用や、子どもとの共感的な環境作り、終了の明確化などもあげられている。PECS や太田ステージプログラムを参考に個別の学習プログラムを準備している学校もあった。

実態把握に関する設問では、学部全体で実施している学校が１１校、行っていない学校が１校だった。実施時期は、年度初めに行っている学校が９校 、年度の中で定期的に行っている学校が３校だった。対象は、「全ての児童に」が９校。方法としては、検査（７校）、保護者からの情報収集（１１校）医師からの情報収集（７校）、前担任からの情報収集（１０校）、行動観察（８校）チェックリスト（１校）であった。特に効果的なものとして、行動観察、PEP－R、K－ABC、太田ステージ評価表などがあげられた。

外部機関、学部、家庭との連携に関する設問では、「自閉症に限らず、保護者との連携は欠かせない。」の回答が６校。他機関との連携については、自閉症・発達障害支援センター（１校）、療育センター（１校）、医療機関（１校）であった。校内研修では、発達小児科のドクターを招聘して「発達障害の理解と対応」「アスペルガー症候群について」の研修を行ったり、PEP－R の研修を行った学校。「自閉症について」「発達検査について」の校内研修や、自閉症に関する講話（土肥先生、岡田先生）を行った学校。自閉症教育実践ガイドブック（特総研）をテキストにした研修会を行った学校が回答を寄せている。自閉症教育に関して、とても重要であると思われる研修の内容として、「自閉症の障害特性の理解」（６校）、「自閉症の指導方法・内容」（１校）、「構造化の実際について」「応用行動分析」（１校）、「コミュニケーションの指導法」「TEACCH の考え方と取り組みについて」（１校）、「ACC 等コミュニケーション支援」「児童生徒理解のためのアセスメント」（実技を含む）（１校）、「具体的な教材作成と活用」（１校）、「認知発達についての理解」（１校）、「パニックへの対応」（１校）、高機能自閉症等の学習」（１校）等があげられた。

○　自閉症の生徒の状況について（中学部）アンケート結果より

１７校中、１１校に自閉症の生徒が在籍し、６校には在籍しないことが分かった。

男女の比率を見てみると、絶対数においても、自閉症児の比率においても遙かに男子が女子を上回り、在籍数に対する自閉症児（疑いも含む）の割合は、男子３５．２１％、女子１０．５３％であった。教員の配置では、他の障害と変わらない配置との回答が、８１．８２％であり、自閉症教育の取り組みについては、学部全体で取り組んでいる学校が４５．４６％、全体では取り組んではいないが、学年、クラス等で個別的に対応しているとの回答が４５．４６％だった。教職員の意識面では、「困難を感じる」、「指導には困難を感じることもあるが、個々の子どもによって様々」の回答が８１．８２％と圧倒的だった。指導に困難を感じることの内容では、「問題となる行動が多い」（５）、「集団活動への参加の難しさ」（８）、「コミュニケーションが取りにくい」（７）等の回答が多かった。行動上の問題（自傷、他傷、物を壊す、パニック等）が著しい生徒の概ねの割合では、２５％未満の回答が７０％だった。

学級編成、日課表、学校行事等についての設問への回答では、教室環境や活動内容の構造化、スケジュール帳を作成したり、タイマーを使用したりなど見通しが持てるような工夫、日課を写真カードやシンボル化したもので示す、帯状日課、儀式的行事は短めに、作業学習中心の教育課程、場面の構造化、視覚呈示（絵カード、文字カード等）具体的呈示、カードで意思疎通を図る等の工夫点が上げられている。

指導内容・方法に関しての回答では、TEACCHプログラムを使用している学校が５校、動作法が５校、応用行動分析が２校、感覚統合療法、だっこ法がそれぞれ１校づつあった。配慮・工夫点として、ADHDから自閉傾向で服薬中、睡眠障害、情緒不安定の生徒で、パニック時、ゆっくりとした雰囲気の中で落ち着くのを待つ。療育センターを利用し、保護者と連携している。マン・ツー・マンで本人にあった教材を使用等があげられた。

実態把握に関する設問では、学部全体で実施している学校が１１校。実施時期は、年度初めに行っている学校が５校 、１学期中に実施している学校が２校。年度の中で定期的に行っている学校が４校だった。対象は、「全ての児童に」が１０校。隔年で実施している学校が１校。方法としては、検査（３校）、保護者からの情報収集（１１校）医師からの情報収集（６校）、前担任からの情報収集（１１校）、行動観察（１０校）チェックリスト（２校）であった。特に効果的なものとして、行動観察、PEP－R、K　－ABC、WISC－R、動機づけ評定尺度などがあげられた。

外部機関、学部、家庭との連携に関する設問では、「自閉症に限らず、保護者との連携は欠かせない。」の回答が４校。他機関との連携については、自閉症・発達障害支援センター（１校）、親の会（１校）、医療機関（３校）であった。連携の具体例では、発達小児科定期受診。センターのアドバイスを受ける。養護教諭同席の上で、主治医と面談等があげられた。校内研修では、ケース研修会。「行動分析」や「構造化」などを学部研修として実施。「動作法」「TEACCHの基礎」「行動障害のとらえ方と具体的な対応」「自閉症の精神学的、医学的な側面からの理解と対応」「発達検査法（PEP－R、K　－ABC、WISC－Ⅲ）の研修。自閉症教育実践ガイドブック（特総研）をテキストにした研修会を行った学校が回答を寄せている。自閉症教育に関して、とても重要であると思われる研修の内容として、「自閉症の障害特性の理解」、「保護者・諸機関との連携」、「自閉症の対応の基本」、「構造化のてだて」、「パニック時の対応」、「コミュニケーションを高めるための具体的な支援方法」「自閉症の進路について」等があげられた。

○　自閉症の生徒の状況について（高等部）アンケート結果より

１７校中、１３校に自閉症の生徒が在籍し、４校には在籍しないことが分かった。

男女の比率を見てみると、絶対数においても、自閉症児の比率においても遙かに男子が女子を上回り、在籍数に対する自閉症児（疑いも含む）の割合は、男子２９．６１％、女子１３．８１％であった。教員の配置では、他の障害と変わらない配置との回答が６６．６７％であり、自閉症教育の取り組みについては、学部全体で取り組んでいる学校が２校、全体では取り組んではいないが、学年、クラス等で個別的に対応している学校が７校、今後の課題が１校、取り組んでいないが１校だった。教職員の意識面では、「困難を感じる」、「指導には困難を感じることもあるが、個々の子どもによって様々」の回答が９１．６７％と圧倒的だった。指導に困難を感じることの内容では、「行動が理解しづらい」（９）、「問題となる行動が多い」（７）、「他の内容に関心が向きにくい」（１）、「集団活動への参加の難しさ」（５）、「パターンが崩しにくい」（２）、「コミュニケーションが取りにくい」（４）等の回答があった。困難を感じている内容として、落ち着かず自傷がある。他者の感情を理解することの難しさ。自己理解。他傷のある生徒から他の生徒を守ることと、良い人間関係を築くこと等があげられた。行動上の問題（自傷、他傷、物を壊す、パニック等）が著しい生徒の概ねの割合では、２５％未満の回答が９１．６７％だった。そのうち、自閉症の生徒の占める割合では、５０％未満（７）、５０％～５９％（１）、１００％（２）の結果だった。

学級編成、日課表、学校行事等についての設問への回答では、集団参加に無理がないように、マン・ツー・マンの個別の対応、教室環境や活動内容の構造化、スケジュールボードを使って、その日の流れ、時間の経過を分かりやすくなるように工夫、見通しが持にくい生徒については、担任の支援法を尊重し、職員全体で共通理解を図って取り組む、日課等の視覚的情報呈示、情報呈示のタイミング、具体物の呈示、帯状日課、個別対応の時間を多く設定し、生徒の状況に応じた教材や、コミュニケーションの取り方の工夫等が上げられている。

指導内容・方法に関しての回答では、TEACCHプログラムを使用している学校が３校、動作法が４校、応用行動分析が２校、音楽療法１校、その他が２校あった。配慮・工夫点として、不安をなくし、落ち着いた行動が出来るように指導、視覚的な情報の提示、大学との連携、マン・ツー・マンで本人にあった教材を使用し、課題を準備して、コミュニケーション及び教科の指導を行っている、個別にサインを用いたコミュニケーションアプローチ、（マカトン法）等があげられた。

実態把握に関する設問では、学部全体で実施している学校が９校。クラスや個人で実施している学校が２校、実施していない学校が１校。実施時期は、年度初めに行っている学校が６校 、１学期中に実施している学校が３校。年度の中で定期的に行っている学校が１校、学期はじめが１校だった。対象は、「全ての生徒に」が７校。新入生にのみ実施している学校が１校。方法としては、検査（５校）、保護者からの情報収集（１０校）、医師からの情報収集（４校）、前担任からの情報収集（１０校）、行動観察（９校）、チェックリスト（２校）であった。特に効果的なものとして、行動観察、PEP－R、K－ABC、WISC－Ⅲなどがあげられた。

外部機関、学部、家庭との連携に関する設問では、「自閉症に限らず、保護者との連携は欠かせない。」の回答が４校。他障害に比べて保護者との連携の必要性は高いの回答が２校。他機関との連携については、大学（１校）、親の会（１校）、医療機関（２校）、その他（ライトハウス児童福祉施設）（１校）であった。連携の具体例では、行動分析の専門家と連携し、取り組みを始めた 。ケース会の実施（自閉症の研修）。主治医より

所見を伺い指導に役立てている。主治医への定期受診。県自閉症・発達支援センターの相談員との事例相談、担当医との事例相談等があげられた。校内で実施している研修については、ケース会の実施。「個別の指導計画」作成後、事例検討会を実施、自閉的傾向のある生徒についても共通理解とその支援法について研修。自閉症教育実践ガイドブック（特総研）をテキストにした研修会。「TEACCH プログラムの概要」の研修。校長講話「生徒理解」。自閉症を始め、広汎性発達障害について、定義やスクリーニング等の研修。「動作法」「TEACCH の基礎」「行動障害のとらえ方と具体的な対応」「自閉症の精神学的・医学的側面からの理解と対応」「発達検査法」（PEP ー R、K ー ABC、WISC ーⅢ）等の回答が寄せられている。自閉症教育に関して、とても重要であると思われる研修の内容として、「自閉症の障害特性の理解」、「保護者・諸機関との連携」、「自閉症の対応の基本」、「構造化のてだて」、「パニック時の対応」、「コミュニケーションを高めるための具体的な支援方法」「自閉症の進路について」「実態把握の方法」「性の問題について」「自傷及び他傷行為のある生徒の適切な支援方法」「TEACCH プログラムのアイディア全般」「生徒一人一人に対する事例研の実施」「障害特性の理解とそれに基づく支援について」等があげられた。

（まとめ）

今回のアンケート調査で、いろいろな点がわかった。県下１７校の特殊教育諸学校での自閉症教育の現状を知ることができた。幼稚部では３校全て自閉症の幼児は在籍しない。小学部では、在籍数の３７．１９％が自閉症あるいは疑いのある児童である。女子に比べ男子の比率が極端に多い。中学部では、２６．６１％、高等部では２４．０２％の結果が出て、やはり男女の比率を見ると極端に男子の数が多い。比率から推測すると、徐々に自閉症の子供が増えていることになる。そのような実情の中で、各学校では、児童生徒の障害状況を的確に把握し、障害特性に応じた指導が展開されている。児童生徒の実情に即した学級編成、日課表、学校行事が工夫されている。指導内容・方法についても、TEACCH プログラムや動作法をはじめ、やはり児童生徒の障害特性に応じた指導内容・方法を創意・工夫されている。実態把握においても、行動観察や前担任からの情報収集、医師からの情報収集など、児童生徒の実情に応じた実態の把握の方法が講じられている。外部機関、学部、家庭との連携については、殆どの学校が、保護者との連携は欠かせないとの回答を示し、外部機関との連携では、自閉症発達障害支援センターや地域支援センター、医療機関、親の会との連携を大事にしながら、さらに大学などの専門家連携を始めている学校もあった。研修内容にしても、「自閉症の障害特性の理解と具体的な支援方法」、「構造化の手だて」、「TEACCH プログラムの概要」等や、「発達検査法」（PEP ー R、K ー ABC、WISC ーⅢ）等の回答が寄せられ、本校での研修の方向性の参考になる。

アンケート結果を総合的に考察することで、本校における自閉症教育の在り方、もしくは、障害特性に応じた教育の在り方についても模索し、充実させることができるものと考える。

4　研究部情報について

（目的）

（１）本校職員が、自己研修をしたい障害特性や支援法に関する参考文献等を紹介することで、より自己研修しやすくする。

（２）幅広く障害特性や支援法の概要を紹介することで、より、さまざまな視点で子どもを捉えることができるようになる。

（今後の展望）

（１）新たに研修したいと思うようになった障害特性や支援法について、自己研修を通して理解を深める。

（２）十分な自己研修を通して、理解が深まった支援法や検査法を実践する。

（内容）

４３部の研究部情報を発行した。目的に添って多岐にわたる情報を職員に提供したが、ページ数に限りがあるので、ここでは目次のみを紹介する。

研究部情報目次

ー　障害特性に応じた支援に関するプロジェクト研究班　ー

No	タイトル
No　1	「自閉症の特性について（1）」
No　2	「ダウン症の特性について」
No　3	「デュシャンヌ型筋ジストロフィーの特性について」
No　4	「自閉症の特性について（2）」
No　5	「自閉症の特性について（3）」
No　6	「自閉症の特性について（4）」
No　7	「TEACCHプログラム（1）」
No　8	「TEACCHプログラム（2）」～物理的構造化～
No　9	「TEACCHプログラム（3）」～スケジュール～
No　10	「TEACCHプログラム（4）」～ワークシステム～
No　11	「ポテージプログラムについて（1）」
No　12	「ポテージプログラムについて（2）」
No　13	「機能的アセスメントによる問題行動解決方法について（1）」
No　14	「機能的アセスメントによる問題行動解決方法について（2）」
No　15	「機能的アセスメントによる問題行動解決方法について（3）」
No　16	「てんかんについて」
No　17	「諸検査の活用～学校にある検査器具（1）～」
No　18	「諸検査の活用～学校にある検査器具（2）～」
No　19	「諸検査の活用～学校にある検査器具（3）～」
No　20	「諸検査の活用～学校にある検査器具（4）～」
No　21	「諸検査の活用～学校にない検査器具（1）～」
No　22	「諸検査の活用～学校にない検査器具（2）～」
No　23	「諸検査の活用～学校にない検査器具（3）～」
No　24	「諸検査の活用～学校にない検査器具（4）～」
No　25	「コロロ・メソッドについて（1）」
No　26	「コロロ・メソッドについて（2）」
No　27	「コロロ・メソッドについて（3）」
No　28	「コロロ・メソッドについて（4）」
No　29	「コロロ・メソッドについて（5）」
No　30	「コロロ・メソッドについて（6）」
No　31	「コロロ・メソッドについて（7）」
No　32	「コロロ・メソッドについて（8）」
No　33	「太田ステージ」
No　34	「TEACCHプログラム編に参加して」
No　35	「感覚統合理論について（1）」
No　36	「感覚統合理論について（2）」
No　37	「感覚統合理論について（3）」
No　38	「感覚統合理論について（4）」
No　39	「学習障害（LD）の障害特性と支援について」
No　40	「ADHDの障害特性と支援について」
No　41	「高機能自閉症・アスペルガー症候群（高機能広汎性発達障害）の障害特性と支援について」
No　42	「二次障害を起こさないために」
No　43	「動作法」

5　関係図書の充実

1　目　的

自閉症教育の充実をめざすにあたっては、その障害特性をはじめ効果的な支援環境、支援方法のあり方等について、全職員が知識を深め、共通認識の元に一人一人の特性にあった支援にあたることが求められる。

そこで、下記のとおり自閉症教育に係わる書籍を購入し、幅広い知見の習得と実践力の向上のために活用していきたい。

2　購入書籍

① 朝日福祉ガイドブック「自閉症のひとたちへの援助システム」
朝日新聞厚生文化事業団

② 朝日福祉ガイドブック「自閉症のひとたちを支援するということ」
朝日新聞厚生文化事業団

③ 「自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための１０のアイデア」
坂井　聡　著　　エンパワメント研究所

④ 「学習障害（ＬＤ）及びその周辺の子どもたち」　同成社

⑤ 「ＡＤＨＤ及びその周辺の子どもたち」　同成社

⑥ 「自閉症教育実践ガイドブック　～今の充実と明日への展望～」
国立特殊教育総合研究所

⑦ 「知的障害や自閉症のある人の暮らしを支える」
香川大学教育学部附属養護学校　　エンパワメント研究所

⑧ 「子ども達のための困ったときの事典」　森　正人、多田小百合、船橋奈生子
こころリソースブック出版会

⑨ 「はじめての応用行動分析」　ＰＡアルバート、ＡＣトルトーマン 原著　二瓶社

⑩ 「応用行動分析学入門」　加藤哲文、山本淳一 編著　学苑社

⑪ 「行動障害の理解と援助」　長畑正道、小林重雄、野口幸弘、園山繁樹　編著
コレール社

⑫「障害特性の理解と発達援助」　ナカニシヤ出版

⑬「コミュニケーションという謎」　鯨岡峻、秦野悦子、やまだようこ　編著
ミネルヴァ書房

⑭「ＡＡＣ入門　拡大・代替コミュニケーションとは」　中邑賢龍　著

⑮「コミュニケーションへの小さなヒント」　石田とし子、稲田勤、小島朋子　著

⑯「見える形でわかりやすく
ＴＥＡＣＣＨにおける視覚的構造化と自立課題」　ﾉｰｽｶﾛﾗｲﾅ大TEACCH部　著

⑱ 「自閉症のＴＥＡＣＣＨ実践」　佐々木正美　編集

⑰「自閉症への親の支援　ＴＥＡＣＣＨ入門」　エリック・ショプラー 著

6　教材教具の充実

（１）目的

音声に言語を持たない児童生徒、持っているが使用しない児童生徒が、機器等の使用で自分の意思を相手に伝えることができるようになることで、コミュニケーション意欲を高め自己決定のスキル獲得を目指す。不適切な行動でコミュニケーションを行ってきた児童生徒の代替行動を支援する方法の一つとしても利用が可能である。

（２）選定製品の概要

ア　VOCA フレックス２

（選定理由）

４・８・１６の３つのパターンの分割が可能で、AC 電源・バッテリーとも利用できる。同一価格帯で同様の機能を持つ製品は本品のみである。

（想定される使い方と効果）

○　言葉によるコミュニケーションが理解できている場合

最大１６のメッセージが登録可能であるため、キー操作が可能であれば生活の中で必要な言葉を登録して使用することで、円滑なコミュニケーションにつなげることができる。

○　音声を使う意味理解が十分できていない場合

子どもは要求語を通して言葉を獲得していくことが知られているため、人に要求する言葉を登録して、音声に対応したシンボルを貼り付けたキーを押すことで音声が発せられ、遊びの中で使用することで発信行動の増加が期待され、音声要求ができることで、パニック等の減少も期待できる。

又、流れが一定の会の司会進行等では、進行に必要な音声を順に登録しておくことで、音声言語を持たなくても会を進行することが可能になり、言葉で周囲が動いていく楽しさを経験し、自発言語の獲得のきっかけとすることが期待できる。

イ　ボイスメモ

（選定理由）

２０秒、１項目記憶再生できるものとしては、安価で、複数題購入できる。再生方法に、ボタンと振動の選択肢がある。

（想定される近い方と効果）

基本的な使い方と効果は前述製品と同様であるが、複数のやりとりに使用するのではなく、児童生徒のニーズから最も必要な１つのメッセージを登録しておき、携帯し必要な場面で使用するものである。最も必要なよう救護、例えば抱っこをしてもらうことが大好きな子どもであれば、「抱っこして」を登録しておけば、いつでも使用することができる。言葉を使って周囲を動かすと言うことを文脈の中での第１ステップとしての利用が考えられる。

ウ　視線コミュニケーションボード　基本セット

（選定理由、使い方等）

身体部位が描かれた透明ボードで、音声言語を持たない児童生徒、指差しできない児童生徒の視線を反対側から捉えることができる。痛みや痒み等を音声や指さしで伝えることができない児童生徒のニーズを捉えて対応することができる。保健室や健康観察等での利用が想定できる。あらかじめ、対象児動静との視線の動きの実際を捉えておく必要があるが、効果は期待できる。